

# 寺門高僧記について

岩橋小彌太

## 一

此の寺門高僧記といふものは別段にめづらしい珍籍といふのでもなく、殊に其の第十の巻は夙くから相當に世間に流布して、國書解題などにも解説が載せられてゐる程であるが、鎌倉時代、宗性や凝然、虎關などよりも古い頃の人の手に成つたもので、且つ内容も随分面白いものであるに于せず、案外に佛教史家の口に昇らず、又先年佛書刊行會が園城寺傳記を佛教全書の内に加へて出版しようとする際、其の一般に配布した説明書に、一名を寺門高僧記といふ記されてゐた様な誤解なごもある位であつて、或はまだ左程に廣く世に行きわたつてゐないものかとも考へられる。此の書をこゝに紹介することも、必ずしも遼東の豕の子のものをわらへを畏れるに及ばない事かも知れない。

私は始め國書解題を見て居つて、寺門高僧記といふものは第十の巻以外は散逸して傳はつてゐないものだから

思つてゐた。然るに先年友人が北桑田郡の郡志を編纂してゐる其の資料探訪に同行を需められて、嵯峨の天龍寺を訪問し、其の寶藏の文書を搜つてゐた時に、偶然此の書の四の巻一冊を見出した。其の題簽に「共二冊」にあるから、更になほ一冊あるべき筈だこ、再度訪問して復た六の巻をも搜し出したのであつた。何しろ傳つてゐないと思つてゐた十卷以外の四六の兩卷が、而も全く方角違ひの天龍寺の記録の簿冊の間から現はれて來たのだから、少からず驚いた。併し後に聞けば、東大の史料編纂掛でも早く他から採集して寫してあるといふことであつて、又自分の寡聞を恥じた次第であるが、何分内容が面白いので可なり丁寧に讀んで見た。

天龍寺のは古抄本の内二冊だけが残つたのだといふのではなく、徳川時代の末の極めて新しい寫本で、題簽に共二冊ある様に、始めから二冊しか傳はつてゐないものを寫したのである。史料編纂掛には第十卷及

び此の兩卷の他に、なほ第一、二、三の三卷の略本一冊がある。これは随分烈しく抄略したものであるけれども、其の内容の大體を推察するには難くない。されば今日私の知つてゐる範圍では、此の書は一、二、三、四、六、十の六卷だけが傳はつて居つて、五、七、八九の四卷、及び一、二、三の卷の廣本の存否が判明しない。併しこれも私の寡聞の致す所であつて、何處かに完本が、そつくり傳つてゐるのかも知れないが、私も随分先輩知友の間に尋ね合はして見たが、まだ見當らない。或は私の此の記事が思はぬ縁となつて、それが廣く世間に顯はれて來る様な事があれば何よりもの事だと思ふ。

二

此の書は其の名の示してゐる通りに、寺門派の高僧の傳記を集めたものであつて、園城寺傳記の別名でもなく、又さういふ風な書物でもない。此の書が昔は随分廣く讀まれたものであつたことは、寺門傳記補録の序文を見ても知られる。此の序文によれば、三井緣起、寺門高僧記、同往生傳、同略傳、百光房所撰大師集、同門徒集など、寺門の書記が甚だ多いといふことであり、又其の引用書目にも種々の書名が見えてゐるが、

今は大抵世間に流布せず、先づ三井寺の事及び其の派の僧傳は本書の他園城寺傳記、同神錄、三井續燈記及び佛教全書の寺誌の部に收められてゐる緣起等二三の書に據るの他はない。そして三井續燈記は其の序にも見えてゐる様に、本書の成つた後三百餘年、未だ通傳あらざるを慨嘆して、文明年間に續編したものであり、園城寺傳記の中にも、行尊や覺忠の記事の如き、明に本書から脱化した跡があつて、此の書はまた古くから相當に重んじられてゐたものであることがわかり、又今日に於いても随分尊重すべき値打のあるものだといふことがいへよう。

たゞ惜しい事には前にも述べた通り、十卷全部揃つてゐないのであるから、其の全部の内容は今日からは知ることが出来ないが、一卷から六卷までは僧傳であり、十の卷は功帝、功臣、功女、即ち園城寺の外護者を擧げてゐる。中間の三卷は僧傳の續きであるか、或は他の別な記事があつたのか明ではない。續燈記の序文によるに、「當寺亦有高僧記、自寛平之昔、迄保元之年、咸載多智高行之人、誠似有其志。」とあつて、保元頃までの人を載せたものだといふことになるが、現存の六の卷は建久七年に薨じた定惠法親王までであるから、續燈記の序にいふ所よりもなほ後年にまで及んで

るるので、此の調子に順次九の巻まで僧傳が續けられてゐたのかとも思ふが、十の巻の功帝は後鳥羽院までを載せて、而も一院に申上げて居り、功臣は關白良經まである。また六の巻にある天王寺別當次第は尊性法親王の還補まで見えてゐるから、此の書の出來たのは大方嘉祿頃から貞永天福の前後の頃にあつたので、此の七、八、九の三巻は、建久以後の約三十年の間の高僧を載せたものか、或は高僧列傳は此の六の巻で終つて、後の三巻には他の記事があつたのかも知れない。續燈記は本書の後を嗣いだものであるが、それには僧傳の他に長吏次第や、別當、探題等を載せ、又年表までも添はつて居り、其の長吏次第も六十一代の良尊から始まつてゐるから、此の散逸の三巻にはかういふ種類の記事があつたかとも思はれる。兎も角今現存の卷々の細目を舉ぐれば、

### 卷第一

大師	猷憲	康濟	增命	良勇	增欽
京意	鴻譽	敬一	悟忍	空惠	倫譽
明達	明仙	勢祐	運昭	房算	行譽
禪藝	智興	千觀	餘慶	穆算	
卷第二					
觀脩	勝算	明肇	觀助	宣悲	慶祚

寺門高僧記について

教靜 文慶 心譽 明尊 永圓 長守

### 卷第三

源泉	定基	行圓	千算	行觀	齊祇
運昭	忠命	慶暹	圓空	順命	良照
權尊	乘延	菱盛	濟算	良秀	兼壽
最圓	圓信	成尋	賴範	濟覺	賴增
元範	快覺	宗範	忠範	觀慶	圓慶
公圓	增珍	慶耀	覺圓	靜圓	靜覺
禎範					

### 卷第四

隆明	增譽	良意	經圓	圓範	齊尊
念圓	觀圓	行尊	公伊	證觀	禪仁
覺俊	永實	增智	仁證	覺宗	

### 卷第六

覺忠	覺讚	房覺	賢覺	定惠
----	----	----	----	----

### 卷第十

功帝	天智天皇	天武天皇	桓武天皇	陽成院
光孝天皇	宇多院	醍醐天皇	圓融院	
一條院	後一條院	後朱雀院	後冷泉院	
後三條院	白河院	堀河院	鳥羽院	

後白河院 一院後鳥羽院

功臣

良房

基經

良相

道長

賴通

忠實

忠實

顯房

賴義

義光

快譽阿闍梨

泰憲

時範

良經

功女

皇太后明子

皇太后昌子内親王

東三條院

太后

上東門院

祐子内親王

前一條院

御子

源隆姫子

待賢門院

後三條院

二條院

であつて、六の卷は紙數が多いにかゝらず、僅に五人の傳をしか載せてゐない。それは時代が新しくなると共に材料が豊富で、自然に記事が詳密に亘るからであらう。此の勢から推せば、仮令後の散逸の三卷が亦僧傳であつても、高々十人前後に過ぎまつたのではあるまいかと思ふ。

### 三

前にも述べた通り、今存してゐる一、二、三の三卷一冊は抄略本であつて、寺門傳記補錄を編した慶音院志晃の書いた奥書にも、

右身第一至第三三帖三帖合卷者以覺祥院藏本書之、今檢

校三帖始末、此疑非全本歟、筆記甚略、而三帖纔爲十五紙、第三卷首刻僧名三十七人、而記事跡者唯是十人而已、是知此非全本、後人所摘書舊本者也、尙見全書人詳之、

寶永七年庚寅秋九月望日 沙門志晃謹書

こいつてゐる。其の第三帖に事蹟を記すもの唯十人のみ、即ち第十一一人目の順命以下の傳記がないといふのは、抄略したといふよりは、覺祥院本の原となる古い抄本に順命以下が亡失して無かつたのかも知れない。併し後の四、六の兩卷の體裁と比較するに非常な簡略さで、智證大師でさへ十七行、良勇阿闍梨が十五行ある外は、大抵は二三行乃至四五行、單に一行ばかりのものも多く一の卷の悟忍、二の卷の觀助、宣悲、教靜などの様なのは、たゞ名を擧げたのみで、一字の傳もない。それを四の卷の行尊が十七枚もあり、覺忠が十六枚もあるのに比ぶれば、抄略本であることは極めて明白である。奥書に

永正三年二月二十九日書之

こあるのは、此の時三卷を抄寫したものであつたかも知れない。今はたゞ此の抄略本のみで、其の完本に接することは出来ない。寺門傳記補錄を編纂する爲めに廣く材料を蒐集した志晃ですら、遂にこの本の他に完

全なものを手にすることが出来なかつた様である。されど此の本も完本が見付からない今日に於いては、其の面影を偲ぶべき唯一のよすがとして重んずべきものであることはいふまでもない。

#### 四

今は先づ四六三十三の三卷に就いて、此の書の内容を一通り紹介することゝしよう。此の書の體裁が略歴を擧げ、法驗を説き、佚事を述べてゐる所は、普通の僧傳の體と異なる所はないが、特に注意すべきは、願文、表白、綸旨、院宣其の他の文書、或は論議、法會等の記録を頗る丁寧に引用してゐることで、寛治六年三月白河院が羅惹院を重造せられ、五口阿闍梨を供養せられた時の大江匡房作の御願文、長承三年八月金堂供養の時の藤原敦光作の御願文、同時登作の咒願文等があり、又治承四年五月以仁王御舉兵の時の牒狀、及び大夫房覺明が代作し「爰清盛入道者平氏之糟糠、武家之塵芥也」の句を挿んで、入道相國の怒を購うたといふ有名な興福寺の返牒なども見えてゐる。そして此の牒狀は源平盛衰記に出て居つて、人の知る所であるが、本書は盛衰記よりも早く出來たもので、又盛衰記の様な作り物語でないだけに、寧ろ此の方を據所とするべきであらう。」

祈禱を重んじるのは此の時代の風であるが、殊に寺門側では山門側よりも一層それを大事にした。されば本書に法驗を煩はしいまでに事々しへ説き立てゝゐるのは尤な事ではあるが、本書の著者は特に論議に興味を有つてゐたらしく、其の記事は常に甚だ詳細である。特に觀圓の條下康和三年十一月鳥羽殿に於ける番論義の寺の觀圓阿闍梨と山の嚴勝阿闍梨との難陳を全部引用してゐるのは、宗學の史料として有益なものであらう。又慈覺智證兩大師の門流が、互に相闘ぎ、永祚元年に山門から餘慶の天台座主を拒みて千手院を焼いてからは全く讐敵の觀を呈するに至つた。本書が恰も山門寺門の鬭諍録であるかの如き狀を示すのは當然の事であるが、特に承徳二年六月法成寺の寺務執行を山門側から補せられた事に就いて、寺門の訴訟、應保二年覺忠の天台座主に補せられたのに就いて、山徒の訴訟、及び定恵法親王の四天王寺別當職運の事に就いての諍論等の如きは、兩方の解決、それを裁決する綸旨院宣或は勅例又は其の證文等を引用して居り、殊に最後の四天王寺別當職關係の文書なきは、鳥羽院の御消息以下累代の證文を羅列して居つて、極めて委曲を盡してゐる。なほ又卷の十には、

一兩門相對、智證門徒勝、慈覺門徒劣事、  
 一朝家一向彼用延曆寺不吉事、  
 一朝家一向被弃延曆寺吉例事、  
 一朝家一向被弃園城寺不吉例事、  
 一天台宗相承正在智證門流、不在慈覺門徒事、  
 一楞嚴一院是慈覺遺家、東西兩塔不然事、  
 一園城寺是本、延曆寺是末事、  
 等の勘例すら載せられ、又それに關する文書までが引かれてゐる。

右の外本書には古事談や宇治拾遺物語、古今共同集を讀む様な興味の深い佚話に富んでゐる事も注意すべきである。宇治拾遺物語の卷の五に、御室戸僧正隆明と一乗寺僧正増譽とが、共に有驗の生佛であつて、而も一方の隱遁生活と、他方の豪華な態度とを面白く對照させた話があるが、本書の隆明、増譽の條にも、亦此の兩人の面白い話が見えてゐる。増益の條下に、壯齡入峰葛城、難行苦行、花族入山、前代未有、大僧正(増譽)是始也、修驗揭焉、隆明一双、俗呼曰、一乘寺御室戸、白河堀河之御宇、無二無三之驗德也、こいひ、隆明の條には、

一乘寺御室戸、互諍修驗甚以不和、御室戸者、不出道場、不斷行法、顯密行叢、靈異揭焉、一乘寺者、

兩山修練、三山苦行、増譽嘲隆明云、若不修龜岷、眼居顯驗者、腰折足疲、效驗第一歟、隆明嘲増譽云、若不學顯密、上下谷峰施德者、鹿猿猪鬼、無双驗者歟、  
 こいひ、又

康和二年、衆徒不和、於羅惹院、有延年會、一寺衆徒、相共遊戲、喧嘩出來、院內之衆、令蹂躪衆徒兩三輩畢、忽以蜂起、切拂羅惹院、改易貫首職畢、以一乘寺權僧正爲貫首、兩僧正雖爲一族舅甥之間、修驗相競、甚以不和、權僧正以使者觸送云、貫首御辭退之所、欲罷補如仰、僧正報云、何事忙言乎、  
 こある。又法印權大僧教公伊は當時第一の碩學である。横川の慈惠大師は死して天狗となり、これこ法門を論じようとした。

本寺有一少人、晚頭着赤衣、忽以悶絕、即又狂亂、告曰、我是智行大天狐也、牽赤衣而臨人、問云誰人乎、答曰非天下第一碩學者不與我言談、猶問云、御名難示、天下第一碩學誰人乎、答曰、公伊法印、干時法印在京、不能案內、愁歎之處、少人又曰、若無第一者、第二可足、問曰第二誰人乎、答曰證義阿闍梨也、即囑龍淵房、令談法門宗義小乘、能問能答、闍梨問曰、抑誰人乎、答曰、横川大僧正良源、公家

賜慈惠之諡、宿習之至、法門染心、五欲猶殘、被牽赤衣、閤裂談深義甚所感也、法味爲悅、早可還本所、小兒即時令復本心畢、

こあつて、此の頃天狗が赤衣の人に憑くといふ俗信があつたことが知られる。又公伊甚だ我慢の人であつた。即ち

閑寂之日、語門弟曰、我是靈山會上、五千上慢之其一人也、根機未熟、雖漏在世之得益、宿緣遂催、得過滅後之弘經、本習之所致、慢心猶難遁、今見顯密之諸德、如父願嬰兒、本寺出仕之砌、常延兩足平臥、公家證誠之座、時按片臂傍伏、又行滿道暹等之末師、法印不用之、蔑如尤甚、常語門弟曰、唐土之習、若有製作、必給日供、仍爲食其供、雖淺智人、多好製書、不必依製作顯其德者也、行滿道暹等食供之淺釋、不叶天台妙樂之儀歟、云々

こ、行滿、道暹は今其の人を詳にする事は出来ないけれども、恐らくは當時世に聞えた學匠であつて、多數の著書があつたのであらう。又此の公伊の剛愎な態度も好一對の話は、菩提房證觀の條に、

保安二年閏五月本寺燒失之時門徒歎曰、干時大僧教咲曰、本寺雖燒證觀未燒、有何苦乎

こいふのがある。是等の話は古事談なごより一層興味

深いものであらう。

又百光房禪仁が別當であつた時、大津に罪人があつて、大衆が其住宅を破却したが、其家が美福門院御領で集積した運上が爲めに紛失した。そこで公家は別當に仰せて紛失物を返辦させようとし、禪仁は大津の住人に負担させたが、住人は大衆に訴へ、遂に大衆蜂起して別當の白水の房を攻め、別當は檢非違使の援を請うたが、共々に敗北して如意峯に追入れられた。其の後に幼學の徒が製した和讃頌の中に、

一正武者流禪仁 口八丈仁曾須加左留々 香爐登良

勢志隨兵波 如意乃夫古昇利瓦連 筑前乃進夜登和勢

留 久須和美末岐乃度岐津久利 少志岐得多利志志留

志仁波 太布流々登古漏爾津地津可辯

こいふのがある。大體落首こいふものの意味は、後世からは明瞭に解せないものが多く、此の所謂和讃頌も甚だ難解のものであるが、最後の「倒るゝ所に土摺む」こいふのは、今昔物語に「受領ハ倒ル所ニ土ヲ蹴メトコソ云ヘ」こいふ後の世の諺が、既に此の頃からあつたことが知られる。なほ増智權僧正の條下には、

本座田樂者源出於此僧正之内、格勸法師原之中、多有得骨者、撰八人爲一列、始稱田樂法師、世號白河

田樂、其後好斯道者多矣、以白河爲本座或號新座、或呼彌座、

こいふ事が見えてゐる。これは田樂法師の起源を説いた唯一のものであつて、私が古い音楽や舞踏の事に興味を有つてゐるだけに、特に面白く讀んだ。併しこゝに田樂法師が増智の格勤法師から始まつたこいふのは正しくはない。田樂が都鄙に盛行したのは餘程早い時からの事で、それが専門の職業者の手に落ちる事も相當に古い時からの事であらう。今昔物語には早く堅田に田樂法師の居つたこゝが見えてゐる。本書の記事は若くは白河田樂の起源を述べてゐるのであるかも知れない。又白河田樂を本座こいひ、他を新座、彌座こいふこいふのも正當ではない。白河には白河の本座新座があり、宇治には宇治の本座新座があつたのである。

又次に經圖の條に、

六十卷俱舍等、有殊勝問答、號圓光抄、世臨（澆脱）季、不流布歟、

こいひ、又覺俊の條に、

撰婆沙論抄出、世所流布也、

こ見えてゐるのも注意に値する。此の圓光抄も婆沙論抄出も共に佚書として今日に傳はてゐないものであらう。

## 五

最後に行尊の條下に引用せられてゐる觀音靈所三十三所巡禮記、及び覺忠の條下の同じ巡禮の記事に就いて一言しなければならぬ。行尊の條に見ゆる巡禮記は前後の記事に聯絡なく、空如こして挿入せられてゐる。同じ行尊の條に裏書を引用してゐる所がある。此の高僧傳は古く卷子本で流布して居つて、裏書があつたのであらう。此の巡禮記も或は裏書の竄入したものであるまいかこも思はれる。此の記録はたゞ靈所の順序を本尊こ、願主こを擧げたゞけのもので、これが必ず行尊の巡禮の記録であるこいふ證據もないが、行尊の條下に挿入せられてゐるこいふこは、全く無理由の事だこも思はれないから、やはり行尊の巡禮の記録を見て差支あるまいかこ思ふ。それによるこ、行尊は日數百廿日で三十三所の巡禮を終へてゐる。覺忠は應保元年正月に巡禮して、七十五日で續願した。

西國巡禮の事に就いては、故藤田明氏の立派な研究があつて、日本交通史論の中に載せられてゐる。それによれば新拾遺集に花山天皇が粉河寺に詣でられた御製があり、千載集に覺忠が三十三所の觀音を拜みて、美濃の谷汲にて詠んだ歌が載せられてゐるから、古く



から觀音靈所の巡禮といふ事があつたことは知られるが、拾芥抄に見えてゐる靈所の名や、建武二年中宮恂子内親王御産御祈の時三十三所の觀音の靈場に誦經を命ぜられた其の名は、三十二しかなく、又現在の靈場と著しく相違してゐるので、靈場や其の順序が一定したのは、徳川時代になつてからの事だらうといはれてゐる。學士の參考せられた材料のみで見れば、誠に穩當な結論であるが、此の行尊等の巡禮記によれば、平安朝當時の靈場も、全く今日と一致してゐる。靈場が今日の如く決定したことも、決して徳川氏の如き新しい時代のこゝではない。璩囊抄に久安六年長谷僧正參詣の次第といふものを引いてゐる。それは行尊と覺忠との中間に當るが、それによれば藤井寺が無い代りに、那智に如意輪堂と千手堂との二箇所の靈場があつて、只一箇所の相違のみで、大體に於いて善く待合してゐる。されば此の觀音の靈場も古今に至つて大した異同がなかつたと思見なければならぬ。建武二年の御産御祈は單に觀音の三十三身に配して、三十三箇所の靈場には誦經せしめたので、西國巡禮の三十三所とは別なものであつたかも知れない。拾芥抄のは大體此の御産御祈の靈場と一致してゐる。これに見えてゐるもので巡禮の靈場がないものに、河崎、神光寺、法性寺、神咒寺、

# 寺門高僧記について

元興寺、東大寺法花堂、同西金堂、天王寺、長樂寺、袋懸等があり、そして壺坂、南圓堂、三室戸、三井寺、清水、草堂、法花寺、書寫山、松尾寺、竹生島、長命寺が關つてゐる。但し東大寺には西金堂がなく、恐らくは興福寺の誤りで、つまり南圓堂の事であらう。な

は  
校合或人本之處、合點廿二箇所附合河崎、中山、長樂堂、神光寺、神呪寺、元興寺、西金堂、天王寺、紀伊三井寺、近江袋懸等無之、  
とあつて、此外に金剛寶寺、仲山寺、長命寺、准胝堂(醍醐)、行願寺(草堂)、千手堂(三室戸)、如意輪(書寫山)、法花寺、松尾寺、觀音寺、竹生島を加へてゐる。中山と紀伊三井寺を除いて、金剛寶寺と仲山寺を加へてゐるのは甚だ滑稽であるが、兎も角も此の或人本のは頗る普通の靈場に近づいてゐる。要するに拾芥抄のは洞院公賢が巡禮の靈場を知らないで、他のものを記入したのであらう。

靈場の順序は行尊のも覺忠のも、璩囊抄のも普通の順序とは頗る相違してゐる。即ち表示すれば、

那智	行尊	覺忠	璩囊抄	拾芥抄	同或人本
紀三井寺	5	6	1	1・2	○
			2	3	○
					○

粉河寺	横尾寺	藤井寺	壺坂寺	岡谷寺	長谷寺	南圓堂	三室戸	醍醐寺	岩間寺	石山寺	三井寺	今熊野	清波羅	六角堂	革角堂	善峰寺	穴持寺	總持寺	勝尾寺	中山寺	播磨清水
4	7	8	3	2	1	32	33	24	23	22	21	25	27	28	29	30	31	9	10	11	12
3	8	9	4	5	6	7	33	25	24	23	22	26	28	29	30	31	32	10	11	12	13
4	5	×	6	7	8	9	33	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
○	○	○	×	○	○	○	×	○	○	○	×	×	○	○	○	×	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○

法花寺 13 14 25  
書寫山 14 15 26  
成相寺 15 16 27  
松尾寺 16 17 28  
竹生島 17 18 29  
長命寺 18 19 30  
觀音寺 19 20 31  
谷汲 18 19 30  
即ち行尊は長谷より出て、大和を南へ、紀路に入り、和泉に歸り、河内より攝津に入り、播磨に出で、丹波丹後より遠く近江に飛び、美濃に出て再び近江に歸り、南近江から宇治川に沿うて山城に入り、三室戸を措いて京都の近傍を巡禮して、最後に三室戸に詣でた。覺忠は今の順序と同じく先づ那智から始めたが、紀伊から大和に入り、尋で和泉、河内、攝津を巡り、其の後は大體行尊の跡を蹈んでゐる。璣囊抄のは大方現今の順序と同様であるが、最後は亦三室戸である。即ち此の時に既に今日の普通の順序が出来上つてゐるのであるが、何れも地理的關係なく三室戸で結願するのは、三十三所の巡禮と寺門との間に特別の關係があつたのではあるまいか。彼の三山の続行の如きも、寺門の特色で、智證大師の門流に特にかゝる巡禮の風のありて

此の觀音靈場の巡禮も亦其の派の人々によつて始められたのであつたかも知れない。因みに現今の普通の順序が京畿を中心として、那智に始り、谷汲に終るのは、關東を標準としたものであるといふ説がある。此の三十三所の靈場巡拜を西國巡禮といふのも、亦關東を基準としての呼び方である。これは坂東三十三所に對照

## 図版Web非公開

いつたのだといはれてゐるが、惠鳳は京都五山の僧であるけれども、なほ西州三十三所といつてゐる。これは其の頃から普通に西國三十三所の觀音を呼び慣はされてゐたからであらう。此等の靈場を特に西國を冠して呼び慣はすのは、さうしても關東を中心とした呼び方でなければならぬ。何故に關東を中心として西國三

せしめた後の名稱では決してない。坂東三十三所は徳川時代に江戸が繁昌して後に出來たものであるが、西國巡禮といふ事は、藤田文學士も引かれてゐる様に、石山寺にある彌勒二年（永正四年）の巡禮札に既に見えて居り、惠鳳の竹居清事の中にも搏桑西州三十三所巡禮觀音堂圖記といふ長文が見えてゐる。藤田氏は石山の巡禮札の奉納者が甲斐の人だから、特に西國巡禮を

十三所と呼び、又何故に關東を標準とした順序が最も普通に行はれる事になつたか、私は不幸にして今直ちに其の疑問に答へ得ないのである。併し今の順序を西國といふ呼び名が、江戸が繁昌した後の事であるといふ見方には、前述の通りさうしても従ふ事が出來ない。なほ此の三十三所巡禮の事は他日研究を進めて見たいと思つてゐる。